佐久新校施設整備事業基本計画策定支援業務委託プロポーザル

審査講評

1　審査概要

本事業のプロポーザルでは、各分野を代表する６名の審査委員（以下「委員」という。）による審査委員会（以下「委員会」という。）により、実施要領を策定の上、一次審査及び二次審査を行い、慎重かつ厳正に審査した。

2　選定結果

委員会が選定した最適候補者等は以下のとおりである。

最適候補者	SALHAUS・ガド建築設計事務所設計共同体 代表構成員　(株)SALHAUS 構成員　(株)ガド建築設計事務所
候補者（次点）	ワンダーズ 代表構成員　平井政俊建築設計事務所 構成員　(株)千田建築設計 構成員　KONTE 一級建築士事務所
準候補者（次々点）	K＋Y＋H共同企業体 代表構成員　(株)渡邉健介建築設計事務所 構成員　下山祥靖建築設計事務所 構成員　(株)ハシゴタカ建築設計事務所

3　審査経過

(1) 第１回審査委員会

日程：　令和５年６月１日（木）

場所：　オンライン会議

内容：　委員長の選出、募集要領における参加資格要件・実施要領等の協議

(2) 第２回審査委員会

日程：　令和５年６月６日（火）

場所：　オンライン会議

内容：　実施要領等・審査方法等の協議

(3) 第３回審査委員会（一次審査）

日程：　令和５年８月20日（日）

場所：　都道府県会館（東京都千代田区）

概要：　二次審査対象者の選定等

最初に、提案書等の提出のあった 23 者について、参加資格を有すること及び提出書類について実施要領に規定する記載要領に従って作成されていることなど失格基準に抵触していないこと、更には委員への事前説明その他接触などがなく留意事項における禁止事項に抵触していないことを確認した。

次に、審査の第一段階として提案書等をもとに各委員が 10 票程度ずつ予備投票を行い、二次審査対象者の選定に向けた議論の対象者を選定した。【表１】

第二段階として、第一段階における予備投票の結果、投票数の少ない者から順番に各委員が提案書等に対する印象・専門的知見からの講評を交えた意見交換を行い、二次審査対象者の選定に向けた投票対象者を９者選定した。

第三段階として、第二段階で選定した９者について各委員が３票ずつ投票した。【表２】

最終段階として、第三段階における投票の結果、投票数の少ない者から順番に提案内容等について議論し、二次審査対象者として６者を選定した。

【表１】一次審査　予備投票結果

投票数	対象者数	審査 No.
５票	３者	１※、７※、14※
４票	２者	４、12※
３票	３者	２、10※、17※
２票	７者	６、８、９、15、16※、22※、23
１票	６者	３、13、18、19※、20、21
０票	２者	５、11
計	23 者	

注１）※は第三段階へ進んだ者　注２）審査 No.は提出書類受付順

【表２】一次審査　投票結果

投票数	対象者数	審査 No.
５票	１者	７※
４票	１者	14※
３票	２者	12※、16※
２票	－	
１票	３者	１※、10、17※
０票	３者	19、22
計	９者	

注３）※は二次審査対象者

(4) 第４回審査委員会（二次審査）

日程：　令和５年９月30日（土）

場所：　野沢北高校岳南会館（長野県佐久市）

概要：　実施体制及び提案書について、一者当たり 15 分の公開プレゼンテーションを６者続けて行った。続けて６者一斉に90分の公開ヒアリングを行った。

ヒアリング終了後、提案書並びにプレゼンテーション及びヒアリングなどを踏まえ、非公開にて次のとおり審議を行った。各委員が専門的知見に基づき、NSD プロジェクトの理念や学びに対する理解、設計の技術力などによる総合的に評価し、各者の作り出すバリューや課題などについて議論した。その上で、各委員が最大２票の投票を行った。【表３】

次いで、投票結果を踏まえ、最適候補者等の選定について議論したところ、投票結果に異論はなく、委員会の総意として、最適候補者に SALHAUS・ガド建築設計事務所設計共同体を選定した。以降、候補者（次点）にワンダーズ、準候補者（次々点）に K+Y+H 共同企業体を選定した。

【表３】二次審査　投票結果

提案者名（発表順）		投票数
1	K+Y+H 共同企業体	2
2	SALHAUS・ガド建築設計事務所設計共同体	6
3	NASCA＋PHa 設計共同企業体	1
4	宮本忠長・Eureka・kttm 共同企業体	0
5	ラーバンデザインオフィス・小林・細谷共同企業体	0
6	ワンダーズ	3

4　講評

(1) 全体講評

北方に浅間山、南方に八ヶ岳を仰ぎ見る、清らかな千曲川が流れる自然豊かな地に位置し、双方に伝統のある野沢北高校と野沢南高校を再編統合する本事業に対して提出された 23 者の提案は、どれも熟慮された提案であった。NSD の理念に共鳴し、多くの時間と労力をかけて、応募の労を取って頂いた方々に感謝の意を表したい。

本事業は、佐久地域の伝統ある両校が、再編統合を機に従来型の「学力」重視の学びから、これからの時代を生きていくうえで必要な課題解決力を育成していく学びへと大胆に変革し、「知の探究校」として再び佐久地域の学びを牽引する高校となることを地域からも期待を集める佐久新校の学校づくりの一環である。また、本プロポーザルにより選ばれた設計者と、長野県が目指す新たな学びを実現する学習空間、新校が目指す「個別最適な学び」を実現できる学習空間となるよう、学びと空間の環境整備を基本計画から一体となって実現する全国的にも例のない事業である。

二次審査に残った 6 者の提案は、新たな学びの実現や地域における学校の在り方、新校の目指す「知の探究校」への希望といった課題に対して真摯に向き合った優れた提案であった。それらからは、学校施設の整備という外形を超えて、地域づくりの視点から「教育と建築の一体改革」を実現しなければいけないという気概が感じられた。最終的には、「夢のある未来社会を地域と共創する『知』の探究校」を目指すにあたり、地域と十分に連携しながら実現する可能性に満ち、非常に説得力のある提案を行った SALHAUS・ガド建築設計事務所設計共同体を最適候補者に選定した。

ここからが本当のスタートである。最適候補者には、学校や地域など学校づくりに関係するすべての人が、自分たちが携わったから素晴らし学校ができたと胸をはって言える学校づくりとなるよう、丁寧に本事業に取り組まれることを期待している。

(2) 個別講評（二次審査対象者）

<u>SALHAUS・ガド建築設計事務所設計共同体</u>《最適候補者》

提案された平面構成は、NSD の理念を十分に理解し検討されたものであるとともに、新校が目指す教育についての理解や ICT の活用に関する理解も深く、チームの高い技術力や提案力がうかがえた。また、回遊する平面計画（ループ案）の提案が多い中でも、考え方が現実的であり、縦動線も細やかに計画されていること、地域理解も含め、新校の計画・運営に重要と考えられる点も丁寧に検証され、練り上げられた提案であった。

一方で、西側建物群（プール含め）を全て取り壊し、再構築する計画は実現のハードルが高く、将来における特別教室棟の建替え時の想定も踏まえ、配置計画の再検討が必要であること。また、駐車場、駐輪場の配置計画が曖昧であるため、再検討が必要であること。さらには、職員室を含む管理部門の配置が、生徒が日常的に使用するエリアと離れている点について、教員と生徒の関係性を構築していく上での在り方を検証し、配置計画に反映させる必要があること。加えて、今後 NSD を進めるにあたり、より創造性が高い提案を生み出す姿勢も必要であること。といった課題もある。

評価される点のみでなく、提案内容にはいくつかの課題はあるものの、二次審査のプレゼンテーションやヒアリングの受け答えからもうかがえるように、指摘を真摯に受け止め、発展的に検討していくだけの力のあるチームであることや、柔軟な対応力にも期待ができ、総合的に高い評価をされた。

ワンダーズ《候補者（次点）》

熱意のある若いチームであるとともに、地域との協働も含め十分に検証されており、非常に魅力的な提案であった。また、平面構成も、細部まで練り上げ、綿密に計画されており、丁寧かつ、熱意を感じる提案であり、期待できるチームであった。

一方で、新しい学びの起点として複雑な平面構成を提案する本案は、運用面において様々な負荷が生じることが懸念された。NSD は新しい提案を積極的に選び取ろうとする事業ではあるが、提案者とのやり取りの中から、ソフトとハードの相互作用や実現のために必要な段階的な取組について十分な確信を持つことが出来なかった。また、提示された RC 2 階建ての校舎構成がどこまで魅力的な表象となるのかという懸念、ツールステーションの実現性についての懸念が示され、僅差で次点に留まることになった。

K+Y+H 共同企業体《準候補者（次々点）》

「学びのたいら」と名付けられた断床のある空間が全体をつなぐ魅力的な空間構成の提案であった。その構想は、他にはないものであり、ＮＳＤが目標とする多様な学びの空間を具現化する可能性を示すものとして、審査委員の評価を得ていた。

一方で、段差の効果を積極的に受け止めながらも、ノーマライゼーションの観点から様々な特性を持った全ての生徒が自らの意思で活動場所を選択できるということと、提案にあるスロープの通路を大きく迂回させる構成との間で、整合が取れるのかが議論となり、広範な評価を集めることが出来なかった。加えて、外部空間に対する提案や、「学び」以外の空間（オンオフの中間の空間）の提示も淡白であったことから、次点に次ぐ評価となった。

（以下、発表順）

NASCA＋PHa 設計共同企業体

円弧上の外形に沿って、クラスルームをずらして配置し、その内側に付随する多様な空間性をもつ雁行型の FLA、更にそ~~ち~~の内側中央部に上下の層間をつなぐ「メディアラーニングボイド」を設けた提案であった。中央に広場、その周囲にクラスルームというわかりやすい平面構成は、実現性について十分に配慮したものとして評価された。ICT への理解についても時代に合った適切な理解と適応がなされていた。

一方で、生徒の居場所となる空間がエリアによって差が大きいのではないか、メディアラーニングボイドについて生徒数と居場所の対比が十分に検証されているかなど、必要な機能と提示された平面計画の整合性について疑念が示された。また、各室の配置が並行配置であるにも関わらず、建物形状が円弧上であることに対する必然性についても議論がなされた。構造方式との整合を確認することが出来なかったこともあって、提案の基本となっている円環構造を積極的に受け止めることは難しいという評価となった。

宮本忠長・Eureka・kttm 共同企業体

学びが学内・外（地域社会）でつながるキャンパスをコンセプトとし、２階に異分野の学びをつなぐ「ラーニングリング」、1 階には「共学共創フィールド」が配置され、学外まで広がる学びの場として「キャンパスエッジ」・「ピロティとアネックス」・「連鎖する庭」などが計画されるなど、明快な平面構成を有する魅力的な提案であった。

一方で、各ゾーンの分け方や正面の無い教室（プロジェクターの映写）の考え方は、これからの新たな学びに十分対応できるか懸念が示された。大職員室の規模が小さく、教員の居場所についても同様の指摘があった。また、アネックスの考え方は集合住宅のフリースペースの考えを援用したユニークなものとして受け止められたが、積極的な運用ソフトが無ければ、誰もいない寂しい場所になってしまいかねないなど、高校での適応について懸念が示され、高い評価を得ることが出来なかった。

ラーバンデザインオフィス・小林・細谷共同企業体

敷地南北を貫く地域連携の道「のざわプロムナード」や、正門に近いところに計画する「地域連携ホール」、学びのループの内外に計画する「11 の庭」など新校のシンボルとなるアイデアが豊富であり、外部動線のコンセプトもわかりやすく、魅力的かつ評価できる提案であった。

一方で、そうした豊富なアイデアを相互の関係性を含めて調整・統合する、もう一段深い整理が必要ではという議論がなされた。具体的には、プロムナードに面した空間は魅力的だが、住民が通り抜けるにとどまらず教育効果が得られるか、地域連携ホールを新校の顔にするには積極的運用を担保する強力な運営が必要なのではないか、グラウンドが住宅地側になるデメリットをどう解消するかといった懸念が示された。前提となる枠組みを組み替えることで価値を見出そうとするアプローチは好感を持って受け取られたが、評価は広がらなかった。

5　プロポーザル概要

(1) 経過

令和 5 年 6 月 1 日	第 1 回審査委員会	
令和 5 年 6 月 6 日	第 2 回審査委員会	
令和 5 年 6 月 23 日	公告	
令和 5 年 7 月 4 日	現地説明会	
令和 5 年 7 月 11 日	参加表明書の提出期限	26 者提出
令和 5 年 8 月 3 日	一次審査書類の提出期限	23 者提出
令和 5 年 8 月 20 日	第 3 回審査委員会 （一次審査）	二次審査対象者の選定（6 者）
令和 5 年 8 月 25 日	一次審査結果通知	
令和 5 年 9 月 20 日	二次審査書類の提出期限	6 者提出
令和 5 年 9 月 30 日	第 4 回審査委員会 （二次審査）	公開プレゼンテーション 公開ヒアリング 最適候補者等の選定

(2) 審査委員会等構成

審査委員会（五十音順・敬称略）

区分	氏名	所属等	分野
委員長	赤松　佳珠子	法政大学・教授 (株)シーラカンスアンドアソシエイツ・代表取締役	建築
委員	垣野　義典	東京理科大学・教授	建築・教育
委員	高橋　純	東京学芸大学・教授	教育
委員	寺内　美紀子	信州大学・教授	建築
委員	西沢　大良	芝浦工業大学・教授 (株)西沢大良建築設計事務所・代表取締役	建築
委員	武者　忠彦	立教大学・教授	地域

アドバイザー

氏名	所属等	分野
小野田　泰明	東北大学・教授	都市・建築学